

上肢障害者の住宅における生活行為に関する研究 2

主査 水村 容子*¹

委員 小川 信子*², 栢森 良二*³, 山田 健司*⁴, 間宮 清*⁵

本研究は、サリドマイド胎芽病による上肢障害者および高齢者、リウマチ患者を調査対象者とし、住宅における上肢障害配慮の手法を検討するものである。サリドマイド者調査では、住宅内での生活行為に伴う身体の痛みがより一層悪化している状況が、高齢者調査では、住宅における加齢対応計画は、一般的な身体の老化に伴う上肢の機能低下へ対応している一方、上肢障害を生じさせる疾患を発症した場合には、対応しきれない状況が明らかになった。リウマチ患者調査では、サンタリー諸室における行為および調理行為や収納部分の利用行為が困難な者が多く、住宅改修や福祉用具の利用を取り入れ解決を図る一方、人的サービスの利用が少ない状況が判明した。

キーワード：1)上肢障害、2)サリドマイド胎芽病者、3)高齢者、4)リウマチ患者、5)住宅改修、6)福祉用具、7)人的サポート、8)生活行為、9)住環境整備

A STUDY ON ACTIVITIES OF DAILY LIVES IN DWELLINGS OF PEOPLE WITH UPPER LIMB DISABILITIES 2

Ch. Hiroko Mizumura

Mem. Nobuko Ogawa, Ryoji Kayamori, Kenji Yamada and Kiyoshi Mamiya

This paper explores about housing arrangements for people with Thalidomide-induced upper limb disabilities, elderly people and sufferer from rheumatism. From the results of these studies, it is become clear following points. The case of Thalidomide people, pains with bodies accompanied with daily behaviors become worse than before. Housing planning for old people is adapted to general aging of physical conditions of upper limb. Sufferer from rheumatism face difficulties to deal with personal hygiene, cooking and use of storage, and some of them introduced into housing adaptations and technical aid, however few people use personal support services.

1. 研究の目的

本研究は、上肢障害者を配慮した住環境整備の手法を検討するものであり「サリドマイド胎芽病による上肢障害者（以下サリドマイド者とする）の住宅における生活行為に関する研究—環境不適応による2次障害発生状況を中心に—」（以下研究1とする）の継続研究である。研究1では、サリドマイド者を調査対象とし、日本およびスウェーデンにおいて生活行為に伴う身体の痛みの発生状況と住環境整備状況を比較検討した。住宅改修や福祉用具を利用することにより、積極的に住環境を改善しているスウェーデンの調査対象者と比較すると、住環境改善をほとんど行っていない日本の調査対象者の身体の痛みは多岐に渡り、複数の痛みを重複している者が多い状況が判明した。この結果より、日本では、住環境整備における上肢障害配慮の視点が依然として不足しているという知見が導かれた。

そこで今回の研究では、日本においてさらなる調査を

重ね、サリドマイド者の生活の経年変化をおさえることにより上肢障害者配慮に関する知見をより一層深めると同時に、新たにサリドマイド者以外の上肢障害者を調査対象に加えることにより、研究1で得た知見、すなわち上肢障害者配慮に関する条件の拡大に努めた。

2. 研究の方法

本研究は、3種類の調査の結果分析および考察によって構成される。

調査1：サリドマイド者に対するヒアリング調査。研究1の調査対象者より、重度の上肢障害を持つと同時に、生活上大きな変化が見受けられた者を2名選定し、身体状況および住環境整備状況の経年変化の把握に努めた。

調査2：高齢者に対するヒアリング調査。高齢者対応に計画あるいは改修された都営住宅居住者に対して、上肢の能力低下の状況と高齢対応住宅計画に対する評価の把握に努めた。

*¹群馬松嶺福祉短期大学 講師

*²北海道浅井学園大学 教授

*³帝京大学 助教授

*⁴群馬松嶺福祉短期大学 助教授

*⁵(財)いしすえ 事務局員

調査3：リウマチ患者に対するヒアリング調査およびアンケート調査。慢性関節リウマチ患者の上肢障害の状況および住環境整備状況の現状把握に努めた。

そして、調査結果の分析および考察においては、上肢障害を配慮した住環境整備の方法を、住宅の改修、福祉用具の利用、人的サービスの利用といった3つの側面から包括的に検討を進めるものとする。

3. サリドマイド胎芽病による上肢障害者に対する調査

3.1 サリドマイド胎芽病による上肢障害とは

サリドマイド胎芽病とは、妊娠初期の女性が服薬したサリドマイド剤により、胎児に、上下肢の奇形や聴覚障害などが生じる病気である。日本では、上肢障害を持つ者の占める割合が高い。サリドマイド胎芽病による上肢障害の特徴は、栢森によると「リーチと握力・ピンチ障害」と説明される。リーチ障害とは、奇形による上肢の短縮や関節の形成不全のため対象物に手が届かないこと、すなわち到達能力の低下を意味し、また、握力・ピンチ障害とは、親指が他の4本の指と対向するように形成されないなど手先・指の奇形により、握力が弱くなったり、つまむ（ピンチ）能力が低下することを意味しており、上肢の巧緻能力の低下を引き起こす。

3.2 調査概要

研究1の調査対象者8名より、重度の上肢障害を持つと同時に、日常生活上の変化のあったJ-2とJ-4を選定し、前回調査からの経年変化をおさえるべくヒアリング調査を実施した。調査は、2002年8月に実施し、調査内容は、①生活上の大きな変化、②その後の身体状況、③前回調査で負担を感じた生活行為の現状、④住環境整備への希望、で構成される。なお、前回調査は1997年6月に実施しており、概ね5年が経過している。

3.3 調査結果

1) J-2に対する調査結果

(1) 生活上の変化

J-2の生活上の変化は、表3-1にまとめた。3年前に、台所、浴室、便所、洗面所を改修し、特に台所の改修により調理行為が楽になったと評価していた。

(2) 身体状況の変化

J-2の身体状況の変化は表3-2に示したが、全般的に身体状況は低下している。前回調査では、首や腰の痛みと視力の低下を訴えていたが、今回の調査では、手先の感覚のぶりにや肩および肩から首にかけてのしびれ・痛みが発生している状況が判明した。特に肩や肩から首にかけての痛みがひどくなっているようである。また、全般的に、生活行為に伴う身体の痛みも悪化している。

(3) 前回調査で痛みを感じた生活行為の現状

前回調査で痛みを感じた生活行為の現状は表3-3に示した。あげられた18行為のうち、洗面脱衣所での「整髪する」行為のみは、身体に負担がかからないよう入浴時に行うようにしていたが、その他の行為は、現在も同様の状況であり、痛みや負担の程度は増していた。

表3-1 J-2の生活上の変化

	変化の内容
住宅の変化	3年前に台所、浴室、便所、洗面台を改修
家族構成の変化	特になし
家事労働の負担状況の変化	台所の改修により調理行為が楽になった

表3-2 J-2の身体状況の変化

	前回の調査時	今回の調査時
年齢	34歳	39歳
障害等級	1級	1級
身長	140cm	140cm
体重	42kg	38kg
手先や指のしびれ	特になし	感覚がにぶくなってきた。足の指の方が触感は鋭い
肩・肘・手首など上肢の関節の痛みやしびれ	特になし	1年ほど前より、肩のしびれや痛み、肩から首にかけてのしびれや痛みが気になりだした。手で物を持つと肩が内出血を起こす
首・背中・腰など身体の痛み	時折、反射的にかがんで手で物を拾った時などに、首が筋違いのような状態になる。また、アイロンがけなど、座って足を浮かせる姿勢で行う作業を長時間行った後、腰に痛みを感じる	肩および首から肩にかけての痛みがひどいので、腰痛はあまり気にならなくなった
視力の低下	視力の低下が進行している。健康診断時、眼鏡の調整時などに特に感じる	今年の1月より使い捨てコンタクトを使用するようになった。作業時に眼鏡が邪魔になることなく快適
その他の身体の痛みや健康上の問題	特になし	生活行為に伴う身体の痛みが全般的にひどくなってきた。ここ数年貧血気味である。体温調節機能が低下し暑さに弱くなった。

表3-3 J-2の痛みを感じた生活行為の現状

場所	行為	前回の状況	今回の状況
浴室	洗面器、手おけで浴槽から湯を汲む	背中に違和感	同じ状況
便所	衣服を着脱する	足や腰への負担	同じ状況
洗面脱衣所	整髪する	腰への負担	入浴時に行い、無理な姿勢はとらないようにしている
台所	食卓に料理を運ぶ	手に負担	同じ状況
収納	押入上部へ物を取納する	足腰に負担	同じ状況
	押入へ布団を上げ下ろしする	足腰に負担	同じ状況
	タンスの引き出しに物を収納する	肩に負担	同じ状況
取っ手・鍵	玄関ドアの取っ手を回しながらドアを開ける閉める	肩の負担・痛み	同じ状況
	住宅内のドアの取っ手を回しながらドアを開ける閉める	肩の負担・痛み	同じ状況
カーテン	カーテンをカーテンレールから取り外し・付ける	腰が痛い	同じ状況
家電製品	電子レンジへ料理を入れる出す	手・肩・顔のやけど	同じ状況
	炊飯器よりご飯をよそる	指のやけど	同じ状況
	掃除機をあてる	背中へ負担・痛み	同じ状況

(4) 住環境整備に対する今後の希望

住宅に関しては、改修できる部分は全て直したので、これ以上の改修は望んでいない。なお、これまで改修に費やした費用は、全額自己負担した。居住する自治体への申請も検討したが、手続きが煩雑であることや改修内容が限られることなどから、自己負担を選択した。

3年前に実施した改修の内容は以下の通りである。

台所：台所設備を1式入れ替えた。その際、調理台の高さを調節（立ち上がり手で調理する場合を前提とした高さ）し、また、ガスコンロ台部分と調理台をフラットにし、調理中の鍋などは持ち上げず、横にずらして移動できるようにした。水道の蛇口の栓は、押しボタンを足元に取り付け、ボタンを蹴れば水が出たり止まる設備とした。また、収納は、全て引き出し式のものとし、食器や調理器具などもその中に収納しているため、奥のものも取り出しやすくなった。なお、収納部分の引き出しは軽い力で操作できる。

浴室：湯張りなどの操作パネルを壁に設置。浴槽からの湯抜きも浴槽の縁についたボタンを押せば抜けるものとした。

便所：フラッシュバルブや温水洗浄便座の操作パネルを壁へ設置。（以前の便座の脇）

洗面所：操作しやすい水道の蛇口の栓へ変更。

福祉用具の利用に関しては、生活の中に取り入れたい物があるが、実在しないこと、あるいは自分の障害のニーズに合わないものが多い。福祉用具に関する情報をもっと入手したいと希望していた。

人的サービスの利用に関しては、夫が家を開けることが多いため、布団干し、高い部分の収納からの物の出し入れ、重い物やかさばる物の買い物など、自分1人では処理が困難な生活行為をサポートするようなサービスを利用したいと希望していた。

2) J-4 に対する調査結果

(1) 生活上の変化

J-4 の生活上の変化は表 3-4 に示した。

住宅では、物干しの高さを変更したり、換気扇をプルスイッチから押しボタンスイッチへ変更といった小規模な改修を行っていた。家族構成では、2人の子供が成長して自立し、育児行為への負担が無くなった。家事労働の負担状況では、子供が成長したため、夫が外勤となり、家事労働を1人で負担することになった。しかし、その内容によっては、子供が手伝うようになってきている。

(2) 身体状況の変化

J-4 の身体状況の変化は、表 3-5 にまとめが、全般的に身体状況は低下している。前回調査であげられた、指のしびれ、腰や腰から足の付け根にかけての痛み、視力の低下はより進行し、持久力および平衡感覚の低下を感じるようになっていた。

(3) 前回調査で痛みを感じた生活行為の現状

前回調査で痛みを感じた生活行為の現状は、表 3-6 に示した。

表 3-4 J-4 の生活上の変化

	変化の内容
住宅の変化	物干し竿の高さを変更した(自分の肩の高さくらいに)、換気扇をプルスイッチから押しボタンスイッチに変更した
家族構成の変化	第1子が14歳、第2子が12歳となり、生活上は自立した。犬を飼い始めた
家事労働の負担状況の変化	夫は外勤となり家事をやらなくなった。娘が手伝うようになったが、学校の授業がある期間はあまり手伝わない

表 3-5 J-4 の身体状況の変化

	前回の調査時	今回の調査時
年齢	35歳	40歳
障害等級	1級	1級
身長	153cm	153cm
体重	43kg	43.5kg
手先や指のしびれ	重い物を長時間持った後、手先がしびれたりけいれんする	以前と比較すると、軽い物を持つてもしびれるようになってきた。重い物は持てなくなってきた。
肩・肘・手首など上肢の関節の痛みやしびれ	肩こりを感じる	肩よりも首の付け根がこるようになった
首・背中・腰など身体の痛み	首はよく寝違える。腰や腰から足の付け根にかけて痛みを感じる	首の寝違えは枕を変えてから改善された。腰や腰から足の付け根にかけての痛みは変わらず
視力の低下	読書をした時、視力の低下を感じる。視界がぼやける。現在の視力は、左右ともに1.5である	視力の低下は進行している気がする
その他の身体の痛みや健康上の問題	足の付け根に痛みや、足腰に筋が張っているなどだるさを感じることもある。それに付随して平行感覚や身体の柔軟性の低下を感じる	足の付け根の痛みは現在も感じる。持久力および平衡感覚は以前より一層低下しているように感じる

表 3-6 J-4 の痛みを感じた生活行為の現状

場所	行為	前回の状況	今回の状況
浴室	身体を洗う	輪足(左足)への負担	同じ状況である。平衡感覚がさらに衰えてきた
	洗面器・手おけで浴槽から湯を汲む	利き足(右足)への負担	手おけを使用するようになってから楽になった
	浴槽の蓋を開ける閉める	輪足(左足)への負担	同じ状況
	浴室の床を磨く	輪足(左足)への負担	同じ状況
	浴槽を磨く	輪足(左足)への負担	同じ状況
便所	衣服を着脱する	腰への負担	同じ状況
	紙で拭く	足や腰への負担	同じ状況
	便器を磨く	右足に負担	右足への負担がさらに重くなった
台所	換気扇をつけるため	腰への負担	壁にスイッチをとりつけたので楽になった
	まな板上で食材を切る	固い食材を切る時、足への負担を感じる	同じ状況
	ガスコンロで調理する	足への負担	同じ状況
	上部収納棚から食材食器を出す	足・腰への負担	子供に頼むようになった
	食卓に料理を運ぶ	腰への負担	同じ状況
	ガスコンロ台まわりを磨く	腰への負担	同じ状況
収納	タンスの引き出しに物を収納する	足腰への負担	同じ状況
	取っ手・錠	窓の錠を開ける閉める	右足の負担
家電製品	電子レンジへ料理を入れる出す	両足(利き足・輪足ともに)への負担	子供に頼むようになった
	掃除機をあてる	腰と足の付け根の痛み	同じ状況
	洗濯機より洗濯物を出す	足・腰への負担	同じ状況
	洗濯物を洗濯機より物干し場へ運ぶ	手への負担	同じ状況であるが、最近では小分けにして運ぶようにしている
	物干しから洗濯物を取り込む	足への負担	物干しの位置を上げた。最近では子供に頼むようになった
スイッチ	ひもタイプの照明スイッチをつける消す	足への負担	ひもの長さを長くしたので、楽になった

22 の生活行為のうち、「洗面器・手おけで浴槽から湯を汲む」、「換気扇をつけるとめる」「物干しから洗濯物を運ぶ」「ひもタイプの照明スイッチをつける消す」4つの行為は、環境を改善することにより負担が軽減していた。また、「上部収納棚から食材食器を出す」「電子レンジへ料理を入れる出す」の行為は、子供に頼み自分では処理しないようにしていた。その他では、前回調査時と同じ状況である行為が多くを占めており、特に「便器を磨く」行為では「右足への負担がさらに重くなった」と答えていた。

(4) 住環境整備に対する今後の希望

住宅に関しては、現在1ヶ所改修を予定している。洗面脱衣所に置かれた洗濯機の床部分であるが、これまでは、二層式洗濯機を使用し、洗濯槽から脱水槽への洗濯物の出し入れを足で行うため、洗濯機を置く部分の床レベルを下げていた。しかし、娘達が手伝うようになってくれたことと、今後全自動洗濯機の購入を予定しており、それに合わせて床レベルをもとの高さに戻す予定である。改修に要する費用は自己負担するつもりである。

福祉用具の利用に関しては、外出した際、排泄時に衣服を着脱するためのフックを探しているが、希望するものが手に入らずに困っている。外出先での使用のため、どのような条件であっても便所内の壁に吸着するような吸盤のついた物を望んでいるが、見つからない。用具全般に関して、自分のニーズに適応した物が手に入らず不満である。

人的サービスの利用に関しては、子ども達が自立し、自分の年齢が進んだ際には、ホームヘルプサービスの利用が必要になると考えている。

4. 高齢者に対する調査

4.1 老化に伴い生じる上肢の能力低下とは

老化に伴う上肢の能力低下の状況を一概に捉えることは困難であるが、関節の萎縮や筋力の低下などにより、対象物を握ったりつまんだりすることが困難になったり、握力の低下などが生じる傾向にある²⁾。また、身体寸法の縮小により、上肢の到達領域も狭まる傾向にある。あわせて高齢になると、脳血管疾患やパーキンソン病など、上肢の麻痺や拘縮・変形を伴う疾病の発症頻度も高くなり、その場合、重度の上肢障害を有することになる。

4.2 調査概要

2001年9月に、東京都東久留米市のシルバーピア住宅（以下ピア住宅とする）および北区のスーパーリフォーム実施団地（以下リフォーム住宅とする）においてヒアリング調査を実施した。ピア住宅では、ワーデンを通じて調査対象者8名を、リフォーム住宅では、団地自治会を通じて7名の調査対象者を選定した。調査内容は主に、

①調査対象者の身体状況、②前住宅（リフォーム前の住宅）について、③上肢による生活行為の処理状況、④高齢対応住宅の対する評価、などによって構成される。

4.3 ピア住宅およびリフォーム住宅

における高齢対応住環境整備

ピア住宅を供給するシルバーピア事業は1988年より東京都によって開始された事業であり、高齢者向けに配慮した構造・設備を持つ集合住宅の供給を行ってきた。住戸内計画は、東京都の策定した「加齢対応型住宅の建設指針」に基づいて行われている。一方、スーパーリフォーム事業は、1988年に開始された事業であり、昭和40年代に建設された都営住宅を、間取りや設備などの変更により新築住宅の水準まで引き上げる改善を行っている。そして、高齢化の進む居住者への対応も視野に入れ、室内・共用部分のバリアフリー化もリフォーム・メニューの1つとして位置づけている。これらの住宅において、上肢の能力低下を配慮したものとしては、ドアノブや水道の蛇口の栓をレバーハンドル式にしたり、使いやすい大きめ電気スイッチの設置など、住宅設備機器のディテールに関するものが見受けられる。

4.4 調査結果

本項では、調査対象者の概要および現住宅に対する評価をまとめる。

1) ピア住宅における調査結果

(1) 調査対象者の身体状況

調査対象者の概要は、表4-1に示した。なお、ピア住宅調査対象者は、事例番号としてP-1からP-8を振った。調査対象者8名の平均年齢は73.3歳、性別は女性6名、男性2名である。身体的条件は、女性が身長140cm代前後、男性は160cm代に分布している。シルバーピア住宅の利用条件は「独立して日常生活を営めること」³⁾であり、比較的健常な高齢者の入居を前提としているが、入居年度から年月が経つに連れ身体状況は低下していく傾向にある。本調査対象者においては、70歳代の女性5名が、健康状態は「時々悪い」と答えている。また、障害者手帳の取得および要介護認定の状況であるが、P-4は平成4年に脳梗塞を発症し、骨粗しょう症も併発しているため要介護認定を受けているが本人には認定結果が不明な状況であった。また、P-6は慢性関節リウマチを発症しており、障害等級は2級、要介護認定1を受けていた。P-6の慢性関節リウマチであるが、両上肢・両下肢に痛み・変形などの症状が出ており、特に、最も症状が重いのは、左手および手指であり、常に痛みを感じる状態である。

(2) 現住宅に対する評価

ピア住宅の住戸内各部分に対する居住者の評価は表

4-2 にまとめた。住戸内各部分ごとに、その評価を5段階で示したものであるが、概ね「大変満足」「やや満足」など高い評価が下されていた。一方、慢性関節リウマチ患者であるP-6は、住宅内での生活に不便を感じる部分が多く存在し、「玄関」「浴室」については「やや不満」と、「便所」「廊下」「バルコニー」「寝室」「台所」「居間」の各部分については「どちらでもない」と評価していた。P-6が、上肢障害に由来して不便を感じる部分として次のような箇所があげられる。「ドアが重い」（玄関）、「ペーパーホルダーの位置が悪い」（便所）、「手すりの位置が悪い」（浴室）、「物干しの高さが低すぎる」（バルコニー）、「換気扇のスイッチやコンセントの位置が悪い」（台所）。以上より、住宅のディテール部分の高さに対する不満であることが判明した。

2) リフォーム住宅における調査結果

(1) 調査対象者の身体状況

調査対象者の概要は表4-3に示した。リフォーム住宅調査の対象者7名には、事例番号R-1からR-7を割り振

表4-1 調査対象者の概要（ピア住宅調査）

	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8
年齢	73	80	75	77	73	72	68	68
性別	女	女	女	女	女	女	男	男
身長	139	150	144	147	150	148	182	164
体重	39	56	40	63	67	40	44	64
障害手帳	なし	なし	なし	なし	なし	2級	なし	なし
介護認定	なし	なし	なし	不明	なし	1	なし	なし
健康状態	時々悪い	良い	時々悪い	常に悪い	時々悪い	時々悪い	普通	普通
普段の生活状況	どこへでも自由に外出できる	●					●	●
	近所なら一人で外出できる		●	●	●	●		
	家の中なら少しは動ける							
	起きているがあまり動けない							
	寝たきり状態である							
	杖などをついている							
	車いす・歩行杖を利用							
	その他					●		
ピア住宅の住居形態	単身	単身	単身	単身	単身	単身	夫婦	夫婦
ピア住宅への入居年度	平9	平9	平8	平8	平11	平11	平11	平11

●:該当する

表4-3 調査対象者の概要（リフォーム住宅調査）

	R-1	R-2	R-3	R-4	R-5	R-6	R-7
年齢	60	67	64	65	66	64	65
性別	女	女	女	女	男	男	男
身長	163	158	151	152	163	168	150
体重	53	54	58	67	83	59	66
障害手帳	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
介護認定	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
健康状態	普通	普通	良い	普通	普通	普通	良い
家族構成	息子の家族と同居						
	娘の家族と同居						●
	独身の息子・娘と同居		●	●		●	
	夫/妻と二人暮らし	●			●		
	一人暮らし		●				

●:該当する

った。なお、7名中3名は65歳未満であるが、リフォーム前後の住宅の状況を把握していると同時に、今後も現住宅への居住継続を希望しており、高齢者による現住宅への評価を目的とする本調査の対象者に加えた。

調査対象者7名の平均年齢は、64.4歳、性別は女性4名、男性3名である。身体的条件では、女性が身長150cm代、男性が160cm代に分布している。障害者手帳取得者および介護認定を受けている者は無く、健康状態も「良い」2名、「普通」5名となっている。

(2) 現住宅に対する評価

リフォーム後の住宅内各部分に対する評価は表4-4に示す。特に上肢の能力低下に対応した内容については表中網がけとした。それによると、玄関扉のレバーハンドル、便所の引き戸の棒状の把手、浴室や台所のレバー式の水栓、スイッチのリモコン化やスイッチの位置、アルミサッシの使い勝手などに関して高い評価を下している者が多く、老化に伴う上肢の能力低下に対応したリフォームの内容に対する評価は概ね高いようであった。

表4-2 住宅各部分に対する評価（ピア住宅調査）

		上肢への配慮							
		P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8
玄 関	大変満足	●	●					●	
	やや満足				●	●			●
	どちらでもない								
便 所	大変満足	●		●	●	●			●
	やや満足						●	●	
	どちらでもない								
浴 室	大変満足	●	●	●	●	●		●	
	やや満足								●
	どちらでもない								
洗 面 所	大変満足		●	●		●	●	●	
	やや満足				●				
	どちらでもない	●							●
廊 下	大変満足		●	●	●	●			
	やや満足								
	どちらでもない	●					●	●	●
バ ル コ ニ ー	大変満足	●	●	●		●		●	
	やや満足				●			●	
	どちらでもない								
寝 室	大変満足		●	●	●	●			
	やや満足	●							
	どちらでもない						●	●	●
台 所	大変満足			●		●			
	やや満足		●		●		●	●	●
	どちらでもない	●							
居 間	大変満足			●	●			●	
	やや満足	●	●					●	●
	どちらでもない						●		

●:該当する

(3) 住環境整備の状況

ピア住宅居住者、リフォーム住宅居住者ともに、居住者の個別ニーズに合わせた住宅改修を行っている例はなかった。福祉用具の導入に関しては、内科系の疾患により手術経験のあるP-3が「杖」を、脳梗塞の予後に骨粗しょう症を発症したP-4が「杖」および体幹支持のための「コルセット」を、慢性関節リウマチを発症しているP-6が「シャワーチェア」、浴槽内での滑り止めのための吸盤、「リウマチ患者用の靴(補装具)」を使用していた。いずれの福祉用具ともに、移動あるいは姿勢維持のためのもので、上肢の能力低下を補うための用具の使用は見受けられなかった。人的サービスの利用については、前出のP-4は「週2回の配食サービス」、「週1回の掃除サービス」、「外出時の送迎サービス」を、P-6は家事援助のために「週3回のホームヘルプサービス」を利用していた。なお、調査対象者全員が比較的健康的なリフォーム住宅調査においては、福祉用具の利用および人的サービスの利用は見受けられなかった。

表 4-4 リフォーム後住宅内各部分への評価 (リフォーム調査)

		R-1	R-2	R-3	R-4	R-5	R-6	R-7
玄関	手すりが使いやすい位置にある			●		●		●
	レバーハンドルが使いやすい	●	●	●		●	●	●
	ちょうど良い広さである	●				●		
	あまり使い勝手がよくない				●	●		
トイレ	型手すりが使いやすい位置にある			●	●	●		●
	引き戸が使いやすい	●	●	●		●	●	●
	ちょうど良い広さである			●		●		
	洋式便器が使いやすい		●					●
	あまり使い勝手がよくない							
浴室	浴槽のまなこ高さが低くて良い	●	●	●	●	●		●
	手すりが使いやすい位置にある	●		●	●	●		●
	ちょうど良い広さである	●		●		●		●
	浴槽のリモコンが使いやすい			●	●	●		●
	水栓がレバー式で使いやすい	●	●	●	●	●		●
あまり使い勝手がよくない								
台所	十分な広さがある							
	収納が十分ある				●			
	水栓がシングルレバー式で使いやすい	●	●	●	●	●		●
あまり使い勝手がよくない			●					
洗面所	収納が十分ある							●
	洗面台の高さがちょうど良い					●		●
	あまり使い勝手がよくない		●	●	●		●	●
居室	段差がなく動きやすい	●	●	●			●	●
	廊下幅が広く動きやすい					●		
	十分な広さがある							
	以前より狭くなって不潔である	●	●	●	●		●	●
	あまり使い勝手がよくない		●		●			
バルコニー	手すりが使いやすい位置にある			●				●
	可動型の物干しが使いやすい							●
	十分な広さがある						●	
	あまり使い勝手がよくない		●	●	●		●	●
サンルーム	アルミサッシが使いやすい	●	●	●	●	●	●	●
	あまり使い勝手がよくない						●	
その他設備など	照明用スイッチが使いやすい場所にある	●	●	●	●	●	●	●
	コンセントが使いやすい位置にある				●	●	●	●
	十分な明るさがある	●			●		●	●
	風通しが良い	●				●		
	騒音が気になる							
全体的に収納が少ない	●	●	●	●		●	●	

●: 上肢の能力低下に対応した部分

5. リウマチ患者に対する調査

5.1 リウマチによる上肢障害とは

慢性関節リウマチとは、関節に腫れや痛みが生じ、徐々に進行し、関節の変形や歩行障害などの機能障害を引き起こす全身性炎症疾患であり、関節の痛みや腫脹、関節変形などを特徴とする。この疾患は、痛みや腫脹・変形などの炎症症状が活発化している時と、鎮静化している時とがあり、無理をすれば何とか行える動作も多いが、炎症症状が出ている時に無理をすると、さらに症状を悪化させてしまう。リウマチは、そのほとんどが慢性関節リウマチであるが、それ以外にも悪性関節リウマチ、若年性関節リウマチ、多発性筋炎、強皮症などの疾患がある。そのいずれも上肢・下肢に症状を呈する疾患であるが、本研究では上肢障害に焦点を当てる。上肢においては、肩・肘・手首などの関節可動域に制限が生じるため、到達能力が低下する。それと同時に、指、手関節、前腕の脱臼や変形・拘縮のため、物を握ったり、手首を回転させる動作が困難になったり、指の変形や痛みなどにより、手先の巧緻能力も低下する。

5.2 調査概要

調査は、ヒアリング調査およびアンケート調査によって構成される。それぞれの調査概要は次の通りである。
ヒアリング調査: 2001年8月に実施。社団法人日本リウマチ友の会を通じて、調査対象者を8名選定し、自宅への訪問ヒアリング調査を行った。調査内容は、①調査対象者の身体状況、②住宅各部分における生活行為の処理状況、③住環境整備の現状(住宅改修、福祉用具の利用、人的サービスの利用について)、である。

アンケート調査: 2002年2月~3月に実施。社団法人日本リウマチ友の会を通じて、関東地方1都6県より500名を無作為抽出し、郵送によるアンケート調査を実施した。調査内容は①現在の身体状況、②住宅内での生活行為の処理状況、③住宅の改修状況、④福祉用具の利用状況、⑤人的サービスの利用状況、によって構成される。311名より回答が寄せられ回収率は62.2%であった。

5.3 事例調査からみたリウマチ患者の

住環境整備の現状

1) 調査対象者の概要

(1) 居住形態および家族構成

調査対象者の概要は表5-1にまとめた通りである。調査対象者にはCR-1からCR-8の事例番号を振った。調査対象者8名とも女性であり、8名中6名が専業主婦、2名は仕事に就いていた。また、家族構成であるが、単身2名、その他の者には、夫、子供、孫などの同居家族がいる。住居形態では、分譲集合住宅居住者4名、持ち家一戸建て住宅居住者2名で、持ち家率は高い。その他

の2名は、それぞれ社宅、公団賃貸住宅に居住していた。

(2) 身体状況

各調査対象者の身体状況の概要は表5-1に、上肢による動作の概況は表5-2に示した。

調査対象者の年齢は、40歳代1名、50歳代4名、60歳代2名、70歳代1名で構成され、平均年齢は57.9歳である。発症年齢は、10歳代1名、20歳代3名、30歳代3名、50歳代1名であり、比較的若い頃より発症している。障害等級では、1級が3名、2級4名、3級1名であり、要介護認定を受けている者も2名いた。なお、40歳以上の慢性関節リウマチ患者は特定疾病患者とし

て介護保険の利用対象者に含まれる。健康状態では、「良い」2名、「時々悪い」4名、「常に悪い」2名であった。上肢の状態は、いずれの調査対象者とも、関節や指などに痛み・しびれ・変形などの複数の症状を持っているが、特に症状の重篤な部位、左右の別には個人差が見受けられた。上肢による動作の概況は表5-2に示したが、できなかったりあるいは症状の進行を防ぐためにしない動作や、軽い物や小さい物の場合はできるといように条件付きであればできるという動作が大半を占めた。特に「回すまたはねじる」「押す」「握る」といった手先での動作のできない者が多い。

表5-1 調査対象者の概容（リウマチ調査）

	CR-1	CR-2	CR-3	CR-4	CR-5	CR-6	CR-7	CR-8
年齢	74	54	61	46	54	57	60	57
発症年齢	54	25	28	27	37	32	32	16
性別	女	女	女	女	女	女	女	女
身長	152	150	139	158	148	147	161	147
体重	35	41.5	50	49	52	55	36	47
障害手帳	2級	3級	2級	2級	1級	1級	1級	2級
介護認定	なし	なし	なし	なし	要介護2	なし	要介護3	なし
健康状態	常に悪い	良い	良い	時々悪い	常に悪い	時々悪い	時々悪い	時々悪い
上肢の状態	痛み・しびれ・変形あり。特に右腕	痛み・しびれ・変形あり。	痛み・しびれ・ふるえ・変形あり	痛み(特に左手首・肩関節)変形あり	痛み・しびれなし。変形あり。両肩が上がらず右肘まがらず	痛みはないが変形あり。手首・肩あがらず両肘人工関節	変形あり	両肩・両肘・両手首に変形あり。左肘に痛みあり。
職業	専業主婦	気孔の教師	専業主婦	専業主婦	専業主婦	専業主婦	団体職員	専業主婦
同居家族	夫・孫	単身	夫	夫	夫・義母・子供	夫・子供	単身	子供

表5-2 上肢による動作の概況（リウマチ調査）

	CR-1	CR-2	CR-3	CR-4	CR-5	CR-6	CR-7	CR-8
年齢	74	54	61	46	54	57	60	57
障害等級	2級	3級	2級	2級	1級	1級	1級	2級
手と腕での動作	持ち上げ	腕力のため力が入らずできる	軽い物であればできる	小さい物であればできる	大きい物や重い物ではできない	大きい物や重い物ではできない	大きい物や重い物ではできない	大きい物や重い物ではできない
	手に持って運ぶ	軽い物であればできる	できる(長時間のため運ぶ)	小さくて軽い物であればできる	小さくて軽い物であればできる	大きい物や重い物ではできない	大きい物や重い物ではできない	軽い物であれば出来る
	腕に抱えて運ぶ	軽い物であればできる	できる(長時間はできない)	軽い物であれば出来る	軽い物であれば出来る	軽い物であれば出来る	できる	軽い物であれば出来る
手先の動作	つまみあげる	右手はできない。左手はできる	できる	大きい物はつまみあげず。左手で行う。	できる	できない	片手ではできない・両手でつまむ	できない
	握る	右手で握るとしびれる	できる	握れない	握れない	できる	小さな物は握りきれない	握れない
	操作する	両手で	できる	両手で	できる	できる	できる	力を要する場合はできない
	引く	軽い物であればできる	できる	困難である。リーチの届く範囲で	できない	自助具(リーチャー)を使用	できる	力を要する場合はできない
	押す	力が入らない	できる	右手薬指、左手薬指と親指でできる	力が入らない	力が入らない	できる	力が入らない
	回すまたはねじる	できない	困難である	困難である	できない	できない	できない	できない

：上肢ではできない、しない

：条件付きでできる、通常とは異なる方法や自助具を持ちいることでできる

2) 生活行為の状況

住宅各部分における生活行為の状況は表5-3にまとめた。表では、69の生活行為の処理方法を、①○：体調の良い時のみや使用する部分の住宅設備機器などの形状が障害の症状に適している場合のみといった条件付きであればできる、②◇：上肢ではできないが身体他の部分でできる、③▲：福祉用具を利用すればできる、④★：生活行為を行う部分の住宅改修を実施したのでできる、⑤◆：家事援助サービスを利用して処理する、⑥●：身辺介助サービスを利用して処理する、⑦※：他の家族が行う、⑧×：できない、⑨空欄：問題なくできる、の9つに分類し示した。なお、複数の方法を重複している場合には、欄内に複数の記号を記入した。また、住宅内に該当する設備・ディテールが無い場合には、欄内に「なし」と示した。

①「○：条件付きでできる」は調査対象者8名の総計で150ヶ所に記されており、多くの生活行為が体調や住宅および設備機器の条件に左右されていることが判明した。②「◇：身体他の部分で」は、CR-8の「便所の床を磨く」1ヶ所のみであり、先天性障害者に見受けられたような、手に代わるの身体の代替部位の使用がほとんどないことがわかった。③「▲：福祉用具を利用して」は、7名が21ヶ所に記している。使用している用具の内容は、回転式をレバー式に変えるためドアノブや水道の蛇口の栓に取り付けるものや、コンセントへの電気コードの着脱を容易にするための器具など、上肢の巧緻能力の低下を補うためのものと、洗濯機への洗濯物の出し入れの時に使用するリーチャーなど、到達能力の低下を補うものに分かれた。④「★：住宅改修を実施」は、7名が32ヶ所に記している。改造の内容は、ドアノブや水道の蛇口の栓のレバー式への改修が多くを占めた。また、CR-2は、押入やクローゼットなどを、上肢の到達域が狭くても使用できるように改修していた。人的サービスに関しては、⑤「◆：家事援助サービスを利用」は3名が30ヶ所に、⑥「●：身辺介助サービスを利用」は1名が9ヶ所に記していた。⑦「※：家族が行う」は、同居家族がいる6名およびCR-7が61ヶ所に記していた。CR-7は近隣に住む姉が訪問していた。⑧「×：できない」は7名が35ヶ所に記していた。特に「ガスの元栓をひねる」に関しては8名中7名ができないと答えていた。

3) 住環境整備の状況

前項の結果より、住宅改修を実施したり福祉用具を利用している者が各々6名、人的サービスを利用している者が3名であることが判明した。次項に2事例を取り上げ、その具体的状況を紹介する。

表5-3 住宅各部分における生活行為の状況（リウマチ調査）

部分	生活行為	CR-1	CR-2	CR-3	CR-4	CR-5	CR-6	CR-7	CR-8
浴室 (9行)	身体を洗う (固定式)	○		○	○	○	※	●	○
	水道の蛇口の栓をひねる	★		★	★	★	○	●	★
	シャワーを浴びる			×	×			●	
	浴槽に湯を張る	○		×	×	×	○	●	
	浴槽の蓋を開ける/閉める	○					○	●	×
	浴槽のガス栓を開ける/閉める	★			★			●	★
	浴槽の水を流す	※	○	×	※	※	※	◆	※
便所 (9行)	便所を掃除する	○	○	○	○	○	○	○	○
	ペーパーホルダーから紙を取り出す	○							
	排水口を掃除する	○						○	
	排水口を掃除する	○						○	
	排水口内の水を流す								
	ウォシュレットの操作/使用を停止する					○			
	便所のドアを開ける/閉める		▲		★	▲		★	★
洗面 及び新 (9行)	洗面の床を磨く	※	○	○	※	▲	※	◆	○
	洗面の床を掃除する	○	○	○	※	※	※	◆	○
	洗面の水を流す	○	○	○	○	○	○	▲	○
	洗面の水を流す	○	○	○	○	○	○	▲	○
	洗面の水を流す	○	○	○	○	○	○	▲	○
	洗面の水を流す	○	○	○	○	○	○	▲	○
	洗面の水を流す	○	○	○	○	○	○	▲	○
台所 食卓 (12行)	水道の蛇口の栓をひねる	★		★		▲	○	★	★
	ガスの元栓をひねる	×	×		×	×	×	×	×
	換気扇を止める/止める	※		○		○		○	○
	まな板上で食器を洗う	○		○	○	○	○	○	○
	加熱調理を始める	○	○	○	○	○	○	▲	○
	加熱調理を完了させる	○	○	○	○	○	○	×	○
	加熱調理を完了させる	※		○		○		○	○
	調理器具を洗う	※		○	※		※	○	※
	食卓を掃除する			○	▲		○	▲	
	上部の扉を開け/閉め/開け/閉め			×	×	※	×	◆	×
食卓に調理器具を置く	○		○	○	※	○	○	○	
食卓で食事をする	○		○	○	○	○	○	○	
収納部分 (押入) (4行)	押入の扉を開け/閉め/開け/閉め			×		▲	※	※	なし
	押入上部の扉を開け/閉め/開け/閉め	×	なし	○	×	×	※	※	なし
	押入下部の扉を開け/閉め/開け/閉め	○	なし	×	×	×	※	※	なし
	押入を上下に移動させる	※	★	※	なし	×	※	◆	なし
(クローゼット) (2行)	クローゼットの扉を開け/閉め/開け/閉め	○	★	なし		なし	なし	なし	
	クローゼット内の扉を開け/閉め/開け/閉め	○	★	なし		なし	なし	なし	×
ドアや窓 (2行)	戸の扉を開け/閉め/開け/閉め								
	住宅内の扉を開け/閉め/開け/閉め					×			
取っ手や鍵 (2行)	ドアノブを開け/閉め/開け/閉め					×		×	○
	ドアノブを開け/閉め/開け/閉め					×		×	○
(住宅内) (2行)	住宅内の扉を開け/閉め/開け/閉め		○	○	○	▲	○	★	★
	住宅内の扉を開け/閉め/開け/閉め		★			×	×	★	★
(廊下) (2行)	廊下の扉を開け/閉め/開け/閉め	○				▲			
	廊下の扉を開け/閉め/開け/閉め			○	○	▲			
家電製品 (調理器具) (6行)	電子レンジの扉を開け/閉め/開け/閉め	○				○			
	電子レンジの扉を開け/閉め/開け/閉め	○			○		○		
(掃除機) (4行)	掃除機をかける	○				※			○
	掃除機をかける	○				※			○
(洗濯機) (6行)	洗濯機をかける	○				○			
	洗濯機をかける	○				○			
(掃除機) (4行)	掃除機をかける	※		※	※	◆	※	◆	※
	掃除機をかける	※		※	※	◆	※	◆	※
(洗濯機) (6行)	洗濯機をかける			○		▲		◆	
	洗濯機をかける			○		○		◆	
(掃除機) (4行)	掃除機をかける					○	▲	◆	※
	掃除機をかける					○	▲	◆	※
スイッチ コンセント 手すり (4行)	照明のスイッチをつける/消す							★	
	コンセントに電気コードを差し込む/はき出す	○	▲	○	○	○	▲	▲	★
(手すり) (4行)	手すりをかける								
	手すりをかける	○			○				

4) 事例の検討

CR-2 の場合：現在、分譲集合住宅に単身で暮らす。障害手帳の等級は3級であり、上肢の関節や手指に痛み・しびれ・変形が生じている。下肢も膝と足首の関節に症状がある。住環境整備の状況は次の通りである。

- ① 住宅改修は、上肢が不自由なため物が取り出しにくく、生活しやすい環境をつくるためこれまで2回実施した。1回目は1974年に実施し、ビルトインの収納の奥行きを90cmから60cmに改修し、押入も両側から使用できるように取り出し口をとりつけ、押入内部の棚も段を増やした。2回目は1988年に実施し、浴室を広くし、また台所の調理台の高さが高すぎたため、調理台1式を買い換え低い高さのものとした。費用はいずれも全額自己負担であった。
- ② 福祉用具は、ドアノブに取り付ける自助具およびコンセントに取り付ける自助具を使用している。いずれも手先の巧緻能力の低下を補うためのものである。
- ③ 現在、ほとんどの生活行為は自分で処理できるため、人的サービスは利用していない。今後は、ホームヘルプサービスを利用していきたいと考えていた。

CR-7 の場合：現在、公団賃貸住宅に単身で暮らす。障害者手帳の等級は1級であり介護保健も要介護3を受けている。両上肢ともに変形があり、また下肢の障害も重度で車いすを使用している。住環境整備の状況は次の通りである。

- ① 1991年に現在暮らす横浜市の公団住宅に入居した。入居が決定した際には入院中であつたが、ケースワーカーが下見をした後OTが対応し、住宅改修を済ませてから入居した。公団の一般住宅を改修した初めての事例である。改修の内容は主に車いすの使用に対応したものである。改修に要した費用は、横浜市の住宅改修費の支給を20万円受け、それ以外は自己負担した。
- ② 福祉用具では、電動車いす、手動車いす、および上肢の巧緻能力の低下を補う自助具を利用している。自助具は、OTがCR-7の身体状況を考慮して作成したもので、歯ブラシの柄を長くしたもの、整髪用ブラシ、ガスコンロの点火スイッチを回転させる道具、物をとる道具などが、リウマチ友の会より贈呈された道具では、コンセントより電気コードを抜くための道具、ドアノブに取り付ける自助具、リーチャー、蛇口に取り付ける自助具、がある。OT作成の自助具は材料費のみ負担しており、自助具は、10年ほど前よりOTに直接相談し製作してもらっているので、非常に使いやすい。

③ 単身の在宅生活であるため人的サービスは頻繁に利用している。現在受けているサービスの内容は次の通りである。ホームヘルプサービスは週5日、1日3時間程度利用しており、サービスの内容は、主に入浴介助、食事の準備、掃除、洗濯である。訪問看護婦は週1日利用で、主に入浴介助を受ける。不定期にガイドヘルパーも利用。これらのサービスの利用に係わる費用であるが、介護保険の給付および横浜市の訪問介護事業の給付を受けている。今後は、緊急通報システムを利用を考えている。

以上の2つの事例より、住宅改修の内容や使用する福祉用具の種類、人的サービスの内容は、障害の症状に加えて、住宅事情や家族構成などの影響を受けている状況が判明した。

5.4 アンケート調査からみたリウマチ患者の全体像

次に、本節では、アンケート調査を通じて、リウマチ患者の全般的な上肢障害の特性および住環境整備状況の特性把握に努める。

1) 調査対象者の属性

調査対象者の属性は表5-4に示した。性別は女性が圧倒的に多く89.7%、男性は7.7%であった。年齢は60歳代が最も多く55.6%を占め、同居家族の有無に関しては家族のいる者が86.2%、住居形態は戸建て持ち家に暮らす者が多く71.1%を占めていた。障害者手帳の保有状況であるが、「手帳あり」が197名(63.3%)であった。障害の等級の内訳は、1級49名、2級95名、3級31名、4級14名、5級2名、無回答6名である。一方、要介護認定を受けた者は87名(28.0%)いた。要介護度の内訳は、要支援3名、要介護1が23名、要介護2が26名、要介護3が11名、要介護4が8名、要介護5が8名、無回答が8名であった。

2) 調査対象者の身体状況

現在の健康状態は表5-5に示した。「良かったり悪かったり」という者が最も多く53.1%、次いで「悪い」が20.6%を占めた。上肢の状態は表5-6の通りであり、多くの者が複数の症状を有していることが判明した。最も多いのが「肩・肘・手首の関節に痺れや痛みがある」であり、全体の74.3%がこの症状を持っている。次いで「指が変形している」が70.7%、「手首関節が動かない・動きにくい」が64.0%、「手の指に痺れや痛みがある」が62.4%を占めた。

3) 生活行為の状況

住宅内における生活行為の状況は表5-7にまとめた。各行為の処理状況は、「できる：普通にできる」「なんとかできる：少し時間がかかっても工夫したり、住宅を改造したり、自助具などを使いながらひととおり自分できる」「できない：手伝ってもらわなければならない」と

表 5-4 調査対象者の概要（リウマチ・アンケート調査）

		n	%
性別	男	24	7.7
	女	279	89.7
	無回答	8	2.6
年齢	20歳代	2	0.6
	30歳代	10	3.2
	40歳代	21	6.8
	50歳代	67	21.6
	60歳代	173	55.6
	無回答	38	12.2
同居家族	いる	268	86.2
	いない(単身)	38	12.2
	施設入所中	1	0.3
	無回答	4	1.3
住居形態	戸建て持ち家	221	71.1
	分譲集合住宅	41	13.2
	民間賃貸住宅	16	5.1
	公的賃貸住宅	16	5.1
	社宅・官舎	2	0.7
	施設	1	0.3
	その他	10	3.2
	無回答	4	1.3
障害	手帳あり	197	63.3
	手帳なし	111	35.7
	無回答	3	1.0
要介護	認定受けた	87	28.0
	認定受けず	217	69.8
	無回答	7	2.2
合計		311	100.0

表 5-5 現在の健康状態（リウマチ・アンケート調査）

健康状態	n	%
良い	22	7.1
普通	59	19.0
良かったり悪かったり	165	53.1
悪い	64	20.6
無回答	1	0.3
合計	311	100.0

表 5-6 上肢の状態（複数回答可）（リウマチ・アンケート調査）

上肢の状態	n	%
肩・肘・手首の関節の痺れや痛みがある	231	74.3
手の指に痺れや痛みがある	194	62.4
肩関節が動かない・動きにくい	126	40.5
肘関節が動かない・動きにくい	131	42.1
手首関節が動かない・動きにくい	199	64.0
指が変形している	220	70.7
肩関節に人工関節が入っている	4	1.3
肘関節に人工関節が入っている	22	7.1
手指に人工関節が入っている	6	1.9
その他	71	22.8
特に問題なし	13	4.2
合計	311	100.0

表 5-7 住宅内における生活行為の状況（リウマチ・アンケート調査）

場所	行為	できる		なんとかできる		できない		無回答		合計	
		n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
浴室	身体を洗う	119	38.3	132	42.4	59	17.0	7	2.3	311	100.0
	頭を洗う	120	38.6	119	38.3	65	20.9	7	2.3	311	100.0
	水道の蛇口の栓をひねる	116	37.3	154	49.5	30	9.6	11	3.5	311	100.0
	シャワーを持つ	149	47.9	124	39.9	25	8.0	13	4.2	311	100.0
	浴室のドアを開ける・閉める	149	47.9	131	42.1	21	6.8	10	3.2	311	100.0
	浴室内を掃除する	70	22.5	82	26.4	149	47.9	10	3.2	311	100.0
便所	衣服を着脱する	135	43.4	145	46.6	24	7.7	7	2.3	311	100.0
	排泄後の処理をする	145	46.6	151	48.6	8	2.6	7	2.3	311	100.0
	便所のドアを開ける・閉める	173	55.6	119	38.3	12	3.9	7	2.3	311	100.0
	便所内を掃除する	80	25.7	105	33.8	117	37.3	9	2.9	311	100.0
洗面脱衣所	水道の蛇口の栓をひねる	120	38.6	148	47.6	36	11.6	7	2.3	311	100.0
	洗顔する	113	36.3	143	46.0	50	16.1	5	1.6	311	100.0
	髪を洗う	122	39.2	135	43.4	49	15.8	5	1.6	311	100.0
	身体を拭く	125	40.2	140	45.0	40	12.9	6	1.9	311	100.0
	衣服を着脱する	120	38.6	142	45.7	43	13.8	6	1.9	311	100.0
台所 食事室	水道の蛇口の栓をひねる	126	40.5	139	44.7	37	11.9	9	2.9	311	100.0
	ガスの元栓をひねる	115	37.0	117	37.6	69	22.2	10	3.2	311	100.0
	まな板上で食材を切る	107	34.4	134	43.1	57	18.3	13	4.2	311	100.0
	加熱調理器で調理する	123	39.5	130	41.8	46	14.8	12	3.9	311	100.0
	食器やなべなどを洗う	101	32.5	140	45.0	59	19.0	11	3.5	311	100.0
	食卓に料理を運ぶ	121	38.9	130	41.8	46	14.8	14	4.5	311	100.0
	食卓で食事する	155	49.8	140	45.0	9	2.9	7	2.3	311	100.0
押入	押入の戸を開閉する	147	47.3	120	38.8	37	11.9	7	2.3	311	100.0
	押入の中に物を収納する	73	23.5	102	32.8	130	41.8	6	1.9	311	100.0
ドア・窓 の取っ手 や鍵	玄関のドアを開閉する	143	46.0	137	44.1	25	8.0	6	1.9	311	100.0
	戸外より玄関の鍵を開閉する	140	45.0	128	41.2	38	12.2	5	1.6	311	100.0
	住宅内より玄関の鍵を開閉する	144	46.3	130	41.8	30	9.8	7	2.3	311	100.0
	住宅内のドアを開閉する	146	46.9	140	45.0	18	5.8	7	2.3	311	100.0
	窓の鍵を開閉する	138	44.4	122	39.2	44	14.1	7	2.3	311	100.0
窓を開閉する	138	44.4	130	41.8	35	11.3	8	2.6	311	100.0	
スイッチ・ コンセント	照明のスイッチをつける・消す	178	57.2	125	40.2	3	1.0	5	1.6	311	100.0
	コンセントに電気コードを差し込む・はずす	104	33.4	138	44.4	63	20.3	6	1.9	311	100.0

↑
15%以上の者が「できない」と答えた行為を網がけ

定義付けし回答していただいた。表中回答者の15%以上が「できない」と答えている行為を網がけした。特にできない者の占める割合の多い行為は、「浴室内の掃除をする」47.9%、「押入の中に物を収納する」が41.9%、「便所内を掃除する」が37.6%であり、いずれも腕の運動と手先の運動を組み合わせて行う行為である。次いで、「ガスの元栓をひねる」22.2%、「頭を洗う」20.9%、「コンセントの電気コードを差し込む・はずす」20.3%の行為があげられている。「頭を洗う」は前出の行為同様、腕と手先の運動を組み合わせた行為であり、「ガスの元栓」と「コンセント」は手先に力を入れながら巧緻な運動を行う行為である。

4) 住環境整備の状況

(1) 住宅改修の状況

住宅改修の実施状況は表5-8、表5-9に示した通りであり、改修の多い場所は、「便所」63.3%、「浴室」57.9%、「台所」54.7%であった。それぞれの場所での改修の内容は表5-10にまとめたが、浴室では「水道の蛇口の栓」66.1%や「ドアまたはドアノブ」38.3%、便所では「温水洗浄便座の設置」74.1%および「ドアまたはドアノブ」33.5%、台所では「水道の蛇口の栓」84.7%など、上肢の巧緻能力の低下を補うための改修が数多く行われていた。なお、改修に要する費用であるが、表5-10より61.8%が「全額自己負担」と答えていた。

(2) 福祉用具の利用状況

福祉用具の利用状況は表5-11にまとめた。利用者の多い用具は、自助具では「孫の手」42.4%、次いで「ドアノブ回し」28.3%、「水道栓回し」25.1%であり、上肢の到達能力や巧緻能力の低下を補うための用具が取り入れられていた。生活補助具では、「温風温水便器」29.6%、「シャワーチェア」19.6%、「浴室でのすべり止めマット」13.8%など、便所や浴室で使用される用具の利用が多かった。なお、福祉用具を利用しないという者も19.3%いた。用具の購入費の負担状況であるが、表5-12より「全額自己負担」と答えた者が53.0%を占めた。

(3) 人的サービスの利用状況

人的サービスの利用状況は表5-13に示した。最も利用されているサービスは「ホームヘルプサービスによる家事援助」であり21.5%であった。一方、「人的サービスを利用しない」という者が60.8%を占めた。サービス利用者の費用の負担状況であるが、表5-14にある通り、「介護保険の居宅サービス」を利用が44.9%、「市区町村のホームヘルプサービス」を利用が26.5%であり、約7割が自治体によるサービスを利用していた。また、6割の者が「人的サービスを利用しない」と答えたが、その理由は表5-15に示した。最も多くあげられた理由は「他人による介護・介助・家事援助などを望まない」であり72.0%を占めた。

表5-8 住宅改修の実施状況（複数回答可）

(リサーチ・アンケート調査)

改修した部分	n	%
浴室の改造・改修	180	57.9
便所の改造・改修	197	63.3
洗面脱衣所の改造・改修	118	37.9
台所の改造・改修	170	54.7
収納の改造・改修	41	13.2
ドア・窓の取っ手や鍵	82	26.4
段差の改組湯	77	24.8
手すりの設置	146	46.9
その他	50	16.1
住宅改修はしていない	60	19.3
合計	311	100.0

表5-9 住宅各部分における改修の状況（複数回答可）

(リサーチ・アンケート調査)

場所	改修の内容	n	%
浴室	水道の蛇口の栓	119	66.1
	シャワー	52	28.9
	ドアまたはドアノブ	69	38.3
	洗い場	43	23.9
	浴槽	62	34.4
	その他	54	30
合計		180	100.0
便所	温水洗浄便座の設置	146	74.1
	便座	57	28.9
	ドアまたはドアノブ	66	33.5
	ペーパーホルダー	34	17.3
	フラッシュバルブ	24	12.2
	その他	49	24.9
無回答	1	0.5	
合計		197	100.0
台所	水道の蛇口の栓	144	84.7
	ガスの元栓	16	9.4
	流し台	14	8.2
	ガスコンロ台	21	12.4
	流し台上下の収納	20	11.8
	テーブル及び椅子	42	24.7
その他	19	11.2	
合計		170	100.0

表5-10 住宅改修費の負担状況（複数回答可）

(リサーチ・アンケート調査)

負担状況	n	%
全額自己負担	155	61.8
公的資金の給付	37	14.7
介護保険・改修費の支給	16	6.4
その他	16	6.4
無回答	39	15.5
合計	251	100.0

表5-11 福祉用具の利用状況（複数回答可）

(リサーチ・アンケート調査)

利用している用具	n	%	
自助具	長柄クシ・ブラシ	48	15.4
	リーチャー	68	21.9
	マジックハンド	45	14.5
	ドアノブ回し	88	28.3
	水道栓回し	78	25.1
	コンセントからのプラグ引き抜き器	18	5.8
	孫の手	132	42.4
	その他	45	14.5
生活補助具	段差解消機	4	1.3
	階段昇降機	16	5.1
	温風温水便器	92	29.6
	浴室でのすべり止めマット	43	13.8
	シャワーチェア	61	19.6
福祉機器は利用せず	身障者用キッチン	3	1
	その他	19	6.1
	福祉機器は利用せず	60	19.3
無回答	19	6.1	
合計	311	100.0	

表 5-12 福祉用具購入費の負担状況（複数回答可）

(リウマチ・アンケート調査)

負担状況	n	%
全額自己負担	123	53.0
市区町村の身体障害者への日常生活用具等への給付	29	12.5
市区町村への老人への日常生活用具等への給付	1	0.4
市区町村による補装具の交付	10	4.3
介護保険福祉用具貸与や購入費の支給	19	8.2
その他	18	7.8
無回答	55	23.7
合計	232	100.0

表 5-13 人的サービスの利用状況（複数回答可）

(リウマチ・アンケート調査)

利用しているサービス	n	%
ホームヘルプサービスによる身辺介助	34	10.9
ホームヘルプサービスによる家事援助	67	21.5
訪問入浴介護	21	6.8
訪問リハビリテーション	5	1.6
配食サービス	16	5.1
移送サービス	26	8.4
その他	27	8.7
人的サービスは利用しない	189	60.8
無回答	27	8.7
合計	311	100.0

6. おわりに

本研究より得た結果は次の通りである。

- 1) サリドマイド者に対する調査では、生活行為に伴う身体の痛みの状況が、5年の歳月を経て、さらに悪化している状況が判明した。住宅改修を行うことにより、生活行為の負担の軽減化を図っている面も見受けられたが、身体状況の悪化を防ぐにはいたっておらず、また今後の家族構成員の変化などを見越して、住宅改修や福祉用具の利用にあわせて人的サービスの利用が有効であると考えられる。
- 2) 但し福祉用具に関しては、本人のニーズに適したものが見つからず手に入らないという意見が強かった。
- 3) 高齢者に対する調査では、都営住宅に取り入れられている加齢対応住宅設計は、一般的な老化に伴う上肢の運動機能の低下には対応している状況が判明した。
- 4) 但し、慢性関節リウマチや脳血管性疾患の後遺症による上肢の麻痺など上肢障害を生じさせる疾患となった場合、現状の加齢対応住宅設計では対応しきれていなかった。
- 5) また、健常な高齢者の場合であっても、身体寸法は様々であり、手すりの取り付け位置や収納の高さなどに対する不満の声があがっていた。
- 6) リウマチ患者に対する調査では、上肢も含めた身体状況が不安定であり、生活行為の処理に際しても、出来る時と出来ない時があること、また、使用するものの形状や重さに応じて、処理出来たり出来なかったりすることが判明した。

表 5-14 人的サービス利用時の費用の負担状況

(リウマチ・アンケート調査)

負担状況	n	%
全額自己負担	14	14.3
市区町村のホームヘルプサービス	26	26.5
市区町村のデイサービス	5	5.1
介護保険の居宅サービス	44	44.9
その他	11	11.2
無回答	9	9.2
合計	98	100.0

表 5-15 人的サービスを利用しない理由（複数回答可）

(リウマチ・アンケート調査)

利用しない理由	n	%
サービスの利用に費用がかかる	15	7.9
どのようなサービスを利用すればよいかわからない	15	7.9
市区町村の福祉サービスの制度や介護保険の制度の内容がわからない	11	6.8
市区町村の福祉サービスの制度や介護保険の申請手続きが複雑である	10	5.3
自宅の中に他人が入ることを望まない	6	3.2
他人による介護・介助・家事援助などを望まない	136	72.0
その他	0	0.0
無回答	25	13.2
合計	189	100.0

7) 特に、サニタリー関係室で行われる行為や、調理、収納部分の利用行為などに困難を覚えている者が多い。その解決策として、住宅改修を行ったり、福祉用具を利用している者も数多く見受けられたが、ホームヘルプサービスなど人的サービスの利用者は少なかった。

8) 住宅改修や福祉用具については、リウマチ患者団体日本リウマチ友の会による情報提供によるところが大きいようである。

本研究では、サリドマイド者、高齢者、リウマチ患者を通して、上肢障害配慮の住環境整備の手法について検討を重ねたが、以上の調査より、上肢障害への対応には、身体状況、家族構成、年齢、その人の生活を把握した上で、住宅改修、福祉用具の利用、人的サービスの利用などを組み合わせて取り入れていくのが効果的であることが判明した。また、本稿では、はじめてリウマチ患者を調査対象として取り上げたが、リウマチ患者の場合、下肢障害への対応も合わせて検討する必要性が感じられた。今後は、上肢障害と他の障害との重複を視野に入れた研究を展開していきたい。

<参考文献>

- 1) 栢森良二：サリドマイド物語、医歯薬出版、1997.6
- 2) 図解住居学編集委員会編：住まいと生活、彰国社、1999.12
- 3) 東京都高齢者在宅生活継続支援検討委員会：東京都高齢者在宅生活継続支援検討委員会報告書（その1）、1999.11
- 4) 東京商工会議所：福祉住環境コーディネーター検定2級テキスト、東京商工会議所、2001.7